

未来を見据え、 新しい都市のかたちを 考えるための10冊

社会状況が刻々と変化する現代において、
都市の諸相はどのように生まれかわるのでしょうか。
今号で紹介した事例の理解を深める10冊を選びました。



10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

1 『シン・ニホン』 ——AI×データ時代における日本の再生と人材育成——

失われつつある日本の「未来を創る」グランドデザインを、詳細なデータと斬新なロジックで提案する希望の書。特に後半に登場する「風の谷を創る」運動は、都市への集中に対しあえて接続を切る＝オフグリッドも視野に入れたオルタナティブな提言だ。文化と人々の価値観が社会を変える原動力であることを再認識させてくれる一冊。

安宅和人＝著
News Picks パブリッシング／2020年



2 『2052』 ——今後40年のグローバル予測——

1970年代、衝撃を与えた『成長の限界』の著者が、数十年後の世界の姿を再び問う。膨大なデータをもとに政治・経済・社会の未来像を提示する内容は、同時に危機の回避のためにとるべき行動を考える出発点となる。なかでも“目覚めること”“視野を広げること”の価値を掲げる「時代精神」の項は、世界が不安に覆われた今こそ熟読に値する。

ヨルゲン・ランダース＝著 野中香方子＝訳
日経BP社／2013年



3 『患者目線の医療改革』

国民皆保険制度を背景に、誰もが質の高いサービスを受けられる日本の医療。一方で、増大する医療費や、施設・病床・医師数の不均衡などは喫緊の課題だ。カギを握るのは患者側の意識改革と、それを可能にする新たな制度設計にあると説く本書は、オンライン診療やDXにとどまらない新技術の活用と、多角的な医療展開の可能性を幅広く提示する。

渡辺英克＝著
日本経済新聞出版／2019年



4 『宇沢弘文の経済学』 ——社会的共通資本の論理——

2014年の没後も、その先進的な理論が注目を浴びる“行動する経済学者”の論文集。取り巻く自然や公共インフラ、医療・教育・金融・財政などを「社会的共通資本」と位置付け、経済主体の暴走に制動をかける思想は、文化・文明を含む奥深い世界観に結実する。特に、橋氏(36頁)の主張と軌を一にする「自動車の社会的費用」は必読だ。

宇沢弘文＝著
日本経済新聞出版社／2015年



5 『デジタルグリッド』

デジタルグリッドとは、電気系統の電氣的な制約を取り払い、しがらみなしに取り引きできる仕組みのこと。その開発者である著者は、日本で再生可能エネルギーが普及しない理由は電力システムにあり、それを突破するカギこそが「デジタルグリッド」だと主張する。難解になりがちな専門技術を丁寧に解説するとともに、今後起こりうる電力とエネルギーの大転換の予測が示されている。

阿部力也＝著
エネルギーフォーラム／2016年



6 『日本企業はモノづくり至上主義で生き残れるか』 ——「スーパー現場」が顧客情報をキャッシュに変える——

生産者視点でモノづくりを続け凋落した日本企業。30年以上日本企業のコンサルタントを続けた著者は、斬新な発想より、グローバルに拡大された「現場」から得られる顧客情報から、企業が咀嚼し具体的な答えを出すことに価値を置く。「いささかも古びておらず、日本企業は本書を繰り返し読むべき」と諸富氏(8頁)も推薦する。

フランシス・マキナー＝著 倉田幸信＝訳
ダイヤモンド社／2014年



7 『ドローンが拓く未来の空』 ——飛行のしくみを知り安全に利用する——

日々進化するドローンだが、その仕組みや機能、そして安全性など未知の部分が多いのも事実である。日本無人機運行管理コンソーシアム(JUTM)代表で工学博士という著者が、開発現場での経験も交えて基礎から解説。実証実験の様子や航空機開発の歴史も踏まえた利用ルール、事故防止策など、ドローンの未来を展望する。

鈴木真二＝著
化学同人／2017年



8 『ポスト資本主義』 ——科学・人間・社会の未来——

成長と拡大を追求してきた近代科学と資本主義。そこから生ずる環境・資源の限界や格差拡大といった課題をどう解決すべきか。著者は現代を成熟・定常化への移行期と捉え、資本主義の新しい形として「電腦資本主義／超資本主義」を提示。持続可能なローカルコミュニティを基盤にした新たな社会のあり方が、幅広い論拠で示される。

広井良典＝著
岩波新書／2015年



9 『仮想空間シフト』

IT批評家の尾原和啓氏と著述家の山口周氏が、コロナ禍によって価値観が強制的にアップデートされた世界の働き方、生き方を語る。仕事も暮らしも、急速に仮想空間にシフトするなか、うまく対応して進化を遂げる者と、取り残される者との断層が大きな問題になると指摘。終盤では「これからの世界を生き抜く10のアクション」と題し、具体的なノウハウも示している。

尾原和啓・山口周＝著
エムディエヌコーポレーション／2020年



10 『コロナ後の世界』

文明史の一大画期となったコロナ禍は、地球と人類の未来をどう変えるのか。『銃・病原菌・鉄』のダイヤモンド、『21世紀の啓蒙』のピンカーら、世界的な6人の知性が語るafter&withコロナの世界。国家のかたち、AIへの新たな期待、新時代の生き方と働き方……等々の論点により、パンデミックで顕在化した人類の弱さとともに、克服の道を示す本書は、豊かな示唆に満ちている。

ジャレド・ダイヤモンドほか＝著 大野和基＝編
文春新書／2020年

